

●前回のテーマ

テーマ「資本主義の起点は都市か農村か？」

演習問題「マニュファクチュアの歴史的意義について、問屋制度との対比において論ぜよ」

- 1 大塚久雄のマニュファクチュア論
- 2 堀江英一のマニュファクチュア論
- 3 サフォークにおける農村織物都市の成立と展開

牧羊業者 → 「富裕な織元」 → ロンドン市場  
「中産の織元」

この関係はどうなっているのか？ → 「ジェントリ」階層の分析

●本日のテーマ

テーマ『「ジェントルマン」とは誰か？』

演習問題「ジェントルマン階層を定義し、彼らがイギリス革命に果たした役割を論ぜよ」

- 1 トーニー×トレヴァー・ローパー論争
- 2 イギリス革命における土地問題
- 3 ケイン・ホブキンスのジェントルマン資本主義論

1 トーニー×トレヴァー・ローパー論争

(1) 「ジェントルマン」とは誰か？

フランス革命と対照的な旧秩序の温存

「ジェントルマンとはジェントルマンらしく金を使う者」(トマス・スミス卿)：無意味なトートロジー以上に定義に成功したものはほとんどない。

中核：ヨーマン(独立自営農民)よりは上で貴族よりは下の土地所有者

裕福な借地農・商人たちも、地主の子弟と同様の教育を受け同じ社交界に入り出すことでジェントルマンと同化

長子相続により数は拡大せず

(2) トーニー「ジェントルマンの勃興」

Richard Henry Tawney, "The Rise of the Gentry, 1558-1640," *The Economic History Review*, Vol. XI, No.1, 1941.

16世紀(市民革命に先立つ1世紀):ジェントリの勃興期

・社会構成体の上層部が崩壊しつつ同時に再構成されていく構造的な変化の進行  
貴族(名門旧家):領主経営悪化と奢侈により財政悪化

国王:王領地の減少

ヨーマン:16世紀末に長期借地契約の終了とともに没落

→農民・貴族・教会(宗教改革後の修道院領再配分)・国王の手からすべりおりてくる所領をジェントリが手中に

政治的には下院(House of Commons)を支配

「領主財政の危機」(マルク・ブロック)←15世紀貨幣価値下落

cf. 東プロシア ユンカー経営(農民を追い立ててそ保有地を併合)

フランス 慣習地代をきびしくとりたてる→フランス革命

イギリス「商売をやってもうけよう」→土地経営の合理化と投資の改良(所領経営の企業化)①小自由農の土地を買い占め集めた土地を大農場にして定期借地で貸し出す。②自給のためではなく営利事業として自家農場を経営・そのための直営地拡大(囲い込み)③農業以外の収入(木材・石炭・鉄・土地投機)

・誰もが適応した訳ではない。没落するジェントルマン・時流に対応する貴族もいる。

中心:企業家的農村ジェントリ

・逆に、成功した実業家も土地所有(権威と確実な投資)を通じてジェントリ化  
「商業的な農業の利潤と地代で暮らしている地主と、土地所有者でもある商人や金融業者とは二つの階級をあらわしているものではなく、一つの階級なのである」

・土地売買の大規模化・活性化を通じた市場メカニズムの進行

→改革(生産性向上)に成功する地主と失敗する地主の分化

未改良地と改良地の価格差「20倍」に

貴族の没落とジェントリの勃興←(反映)←土地経営方式の差

→絶対王政を頂点とする封建的土地所有体系・法が「農業の資本主義化」の限界に転化する→イギリス革命

### (3) トレヴァ・ローパーのトニー批判

トレヴァ・ローパー:土地経営方式(トニー)ではなく、商業・金融・とくに官職保有こそが、没落か勃興かを決定

→「貴族×ジェントリ」(トニー)よりも「農村ジェントリ×宮廷ジェントリ」の対立が重要

イギリス革命

トニー:没落貴族×勃興ジェントリ・商業ブルジョアの対抗

トレヴァ・ローパー:トニー説では、「イギリス革命における独立派の台頭とロンドン商

人の保守化（貴族への接近）を説明し得ない。→イギリス革命：官職保有をめぐるジェントリ相互の争い（独立派＝「官職をもたない農村のたんなるジェントリ」の宮廷ジェントリに企てた反乱→王政復古：宮廷ブルジョアの勝利）

年表) イギリス革命関連年表

## 2 イギリス革命における土地問題

### (1)イギリス革命は「上から」か「下から」か？

#### ●「下から」の道

経済過程：封建的土地所有の解体→自由な独立自営農民層の形成

イギリス革命：経済過程に照応して、独立自営農民層を基軸として進行

### (2)イギリス革命における二つの綱領

国王－領主－農民の重層的土地所有諸関係：開放耕地制度

- ・ ジェントリを中心とした領主的な土地所有の方向性
- ・ 農民の隷農的零細土地保有の方向性

#### ①汎議会派（長老派・独立派）の綱領：地主的綱領

「アクスブリジ提案」（1644年1月議会から国王に提出）封建的諸制限の撤廃

- ・ 土地所有者による囲い込みの自由：農業のブルジョアの進化の前提
- ・ 王党派からの土地没収

→重層的土地所有体系の上部の一環をなす国王最高領主権－中間領主権関係を否定→領主的土地所有の排他的私有権化（→領主的土地所有を維持しつつそれをあらたなブルジョアの基礎のうえで地主的土地所有として再生させる）

#### ②水平派綱領：農民的綱領

- ・ 軍隊の下級士官・兵士層
- 「軍隊の主張」（1647年10月）
- ・ 土地保有農民の最大多数を自由な農民的土地所有者にかえる（＝領主的土地所有の破綻による農民的な土地所有の創出）

#### ③水平派の蜂起の敗北→独立派勝利

1649年3月～9月 水平派の蜂起の敗北と独立派による弾圧→独立派独裁の確立

農民的綱領（②）の阻止と地主的綱領（①）の貫徹

イギリス革命の土地変革：「地主的な道」を通っての三分制成立への方向づけ

（尾崎芳治「ブルジョアの土地変革」の理論：参考文献参照）

### 3 ケイン・ホブキンスのジェントルマン資本主義論

#### (1) ケイン・ホブキンスのジェントルマン資本主義論

1970年代以降：「ジェントルマン資本主義」論—イギリス経済史・帝国史の中心テーマ  
製造業者の利害：経済および外交政策の形成に対して、今まで考えられていたほどは大きな影響力をもたなかった。

1688年名誉革命「地主利害を田圃の塹壕内に隠し、政治体制に対する彼らの要塞をより堅固にした」→ジェントルマン秩序の形成（シティの指導的な金融業者や商人はジェントルマンの身分を与えられていた）：権力が低下しつつある地主階級の要求と、拡大しつつあるサービス部門の妥協；地主階級の財産と、革命を財政的に支えたマーチャント・バンカーの財産の結合

1688年（名誉革命）～1850年：「ジェントルマン資本主義」の確立「改革的地主とそのジュニア・パートナーである改革的金融業者によって率いられた資本主義の一形態」

19世紀中葉～：イギリスの経済成長のエンジン：サービス部門（第一次産業・第二次産業に属さないすべての活動の総計）→シティを中核とするイングランド南東部

国内）自由貿易・金本位制・均衡財政→最終的な受益者：ロンドンのシティとサービス部門の関係者たち（世界の工場としてのイギリスの立場よりも国際的サービス・センターとしての地位を優先※自由貿易(1846年穀物法廃止)：ロンドンを食料と原料の世界取引の巨大中心地にかえ、海運、海上保険、商品取引所が急成長しシティに大きな利益をもたらした)

国際）大英帝国の拡張：ジェントルマン秩序の輸出

ジェントルマン基準：物を作るということには低い順位しか与えられない。

#### (2) 利害分析

##### 図) ジェントルマン秩序における諸経済グループ

	収入形態	サブグループ	社会階層	地域
土地利害	地代	非改革地主 改革地主	ジェントルマン的結合	
資本利害	利潤；利子 産業利潤	金融資本家 製造業資本家 農業資本家	ジェントルマン的結合 ×	南東部 北部（地方）
労働利害	労賃	農業労働者 製造業労働者		

・製造業資本家（コブテン主義 Cobdenite）：労働者階級からの圧力に対処するためジェン

トルマン資本主義との妥協

- ・ 北部の製造業地帯における資本市場：産業金融

↑

↓

シティを中核とする資本市場：北部・南部の短期輸出信用を供給し、帝国膨張とともに巨大化する長期輸出信用を供給

※ケイン・ホブキンス：両者の分離・後者は前者よりはるかに大きな規模をもつ

### 小括と次回のテーマ

16世紀の「ジェントリの勃興」→ピューリタン革命(1649:「ブルジョア的土地変革」と名誉革命(1688:「ジェントルマン秩序」確立)を通じて形成された「ジェントルマン資本主義」(地主と金融資本家の同盟)→大英帝国の膨張

製造業利害と「ジェントルマン資本主義」の基本的関係はどのようなものであったか？

- ① 綿業王カークライト(1785年力織機発明)の軌跡をたどる過程で考察(次週)
- ② 選挙法改正(1832年以降)と穀物法撤廃(1846年)の分析(講義第3部)

5月14日：第5講 綿工業と機械制大工業

大塚久雄『欧州経済史』2章2

堀江英一『経済史入門』7章1AB10章1A

演習問題「なぜ18世紀後半には綿工業が毛織物工業を急速に追い抜いたのか？」

参考文献：

松浦高嶺「10章 ジェントルマンの功罪」(青山吉信・今井宏編『新版概説イギリス史』有斐閣選書、1982年)

今井宏『ヒストリカルガイド・イギリス』山川出版社、2000年。第6章～第9章。

ブルード『英国史』白水社、1976年。

トニー著、浜林正夫訳『ジェントリの勃興』未来社、1957年。

尾崎芳治「イギリス革命と農業・土地問題—地主的改革と『三分制』(一)～(四)」『経済論叢』86巻第2号～87巻第4号

尾崎芳治「第4章 イギリス革命の土地闘争」(堀江英一編『イギリス革命の研究』青木書店、1962年)

P. J. ケイン・A. G. ホブキンス著、竹内幸雄・秋田茂訳『ジェントルマン資本主義の帝国 I』名古屋大学出版会、1997年。

バット・ハドソン著、大倉正雄訳『産業革命』未来社、1999年。